

36年の春秋

私が入所したのは1981年、昭和56年ですから、かれこれ36年間研究所にお世話になったことになります。入所の頃は奈良国立文化財研究所の時代で、平城宮跡発掘調査部には計測修景調査室があり、考古第一調査室は名目上は7名の調査員がいるという、今から思えば夢のような時代だったかもしれません。ただその場にいあわせた者にとっては、必死で調査をやっていたというのが偽らざる所でした。その後、1993年にカンボジアの調査が仕事に加わり、2001年の独法化、2010年の平城遷都祭等、色々な経験をさせていただきました。

ただ、今思えば、常に思い続けていたのは、仕事としての研究と個人の研究者として立ち位置とのバランスだったような気がします。この課題はおそらく今の所員の方々も常に考え、思い悩む点ではないかと思います。入所の頃から比べると所員の数は2/3に減り、仕事量は倍増している現状ですから、1所員にかかる負担は、相当に増えていることは事実です。しかしだからこそ、個人研究の進展が研究所の研究と発展を支えていくという構図は、より強くなっているように感じます。所員の今後の活躍に期待しています。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

(副所長 杉山 洋)

思い出深い発掘の日々

私は、1987年の12月に入所、平城宮跡発掘調査部考古第一調査室に配属されました。思えば、私の研究所人生は発掘三昧だったように思います。

入所当時は、そごうデパート建設予定地の発掘調査が峠にさしかかる頃でした。そこは長屋王邸跡で、冬の新人研修と翌年度最初の夏現場班員として調査したのがこの現場でした。夏の夕暮れ、発掘作業終了後に総担当者のHさんと共に現場を点検していたところ、工事掘削地区壁際に木簡土坑を発見、これがあの長屋王家木簡溝を発掘する契機となったことは、今でも鮮明に思い出されます。

その後も長屋王家木簡溝（北端）、二条大路木簡溝と藤原麻呂邸跡、前期式部省と神祇官、藤原京左京七条一坊等、木簡出土・木簡関連遺跡の調査に多く携わりました。星の巡り合わせなのでしょうが、私のテーマとしている冶金関連遺跡調査にはあまり

恵まれませんでした。ただ、2011年に朱雀大路縁地工房を調査、平城京の発掘調査開始以来、40年以上不明であった京内官営鍛冶工房の実態解明に一役買うことができたのは、実に幸運だったと思います。

このような発掘人生も、関係者の皆様方に支えていただいたお陰であり、ここに改めて深く感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

(埋蔵文化財センター長 小池 伸彦)

退職にあたって

私が早稲田大学建築学科を卒業したのは1980年で、最初に就職したのは工務店でした。そこで文化財建造物修理工事の現場代理人等を5年間勤めた後、三重県鈴鹿郡関町（現亀山市）にて町の公務員となり、5年間伝建地区の修理修景事業を経験し、次に長野県木曽郡楢川村（現塩尻市）に移り、2年間仕事をしていると、今度は文化庁建造物課（当時）に来いということで、国家公務員となりました。

文化庁では重要文化財建造物の修理工事現場を回ったほか、ベトナム・クアンナム省ホイアンの町並み保存の協力事業に参加し、通算で30回ほど現地に出張しました。元々大仏様建築に興味のあった私にとって、ベトナム建築はドストライクでした。

2003年からは奈良県教育委員会に出向し、唐招提寺金堂の解体修理に携わる中、古代建築の修理を目の当たりにできたことは自分にとって大きな収穫でした。2006年に文化庁に戻り、2011年からは奈良文化財研究所にお世話になることになりました。

今更ながら多くの幸運と引き立てていただいた諸先輩方に恵まれた長いようで短かった仕事生活であったと思います。キャリアの最後の奈文研でも、これまであまり意識していなかった分野で知識を深めることができました。感謝申し上げます。

(文化遺産部長 林 良彦)



林部長・杉山副所長・小池センター長（左から）